

# 特集

## 高齢犬猫の長生きの秘訣

毎日のケアでいきいき

# シニアライフ

**シニア犬の暮らし** シニア犬の暮らしを拝見しました！

アズキさん（メス）は、11歳のニューファンランド犬。砂山記子（京都市在住）さんの愛犬です。体重は約56kgと超大型で人間ならおよそ90歳。後ろ足が弱くなってきたとこのことで介護用の後ろ足ハーネスをつけていますが、食欲も十分にありそうで、毛艶もよく元気です。

**シニア犬の1日** 朝6時半、車で近くの公園に行き、散歩します。「アズキの若い時は、筋力をつけるため、毎日2時間歩きました。今は、無理をさせず、後ろ足の

状態を見ながら30分ほどで帰ります」  
▼アズキさん  
帰宅後、朝ごはん。体重管理のため、きちんと定められた量を食べ、いつも完食しているそう。玄関から家の奥までバリアフリーにして、



段差をつくらず、滑らないための衝撃吸収マットや、起き上がりやすくする高反発マットも利用しているため、アズキさんは好きなように移動しているそうです。夕方5時頃、もう一度お散歩をして、その後晩ご飯です。

**飼い主さんのお話** これまで小型から大型まで飼ってこれた十数匹の犬は、みんな長生きだったそうです。その秘訣をお聞きしたところ、「まず食事の管理に気をつけ、決めた目標体重に合わせてきました。絶対に人間の食べ物は与えませんでした」とのこと。また、「生活のリズムをつくることも大切で、運動はさせ過ぎることなく散歩をしっかりと、しつこくは訓練士から一定期間受けた後も、家で訓練を続けています。あと、何かあればすぐに獣医さんに診てもらおうようにしています。愛犬たちがいつも人間のそばにいられるようにして育てています」という砂山さん。「犬を飼うのは、経済面でもしつけの面でも覚悟が必要です。亡くなった時は悲しいけれど、その体験はとても大事。きちんとみとめることまでできなくてはいけないと思っています」と、貴重なお話を聞かせていただきました。

**ペットケア専門士に聞きました** 砂山さんは、将来アズキさんが立てなくなった時のことを考え、今から知ってもらえた方が安心して世話を任せられるからと、週2回、夕方の散歩をペットケア専門士の松下比登美さんに代行してもらっています。「何か気づいたら、どんな些細なことでも気軽に聞けるような獣医さんを見つけておくことが大切です」と語る松下



さんがどの飼い主さんにもまず勧められるのは、まず、「健康診断を受けること」だそうです。受診時には尿を持参して尿検査をしてもらうことで、食生活の問題点もわかり、結石や膀胱炎の予防になるそうです。次に、「年齢に合った生活習慣の見直し」が必要で、これまで当たり前であったことが今の年齢では不便になっていることがあるそうです。たとえば、室温、高低差、トイレの場所、ご飯の場所、ご飯台の高さ、器の形など、見直しのポイントを具体的に挙げていただきました。

また、シニア期の問題を防ぐうえで重要なことは、「愛犬をきちんとしつけておくこと」だそうです。例えばヘルニアや骨折を防ぐため、階段の昇り降りや、椅子やソファへ飛び乗ったりさせない。愛犬に介護が必要になった時お世話する内容が変わるので、室内でトイレができたり、噛

み癖がなく、どこを触られても平気で、マナーベルトや服を着用できたりすることが望ましいそうです。

**獣医さんに聞きました** 長生きの秘訣を京都市獣医師会副会長の井葉野義弘先生にお聞きました。「基本は、①適切な食事、②病気の予防（避妊去勢手術やワクチン接種）、③病気の早期発見と適切な治療の3つです。痩せてくる、腰が丸くなる、目や耳が悪くなる、食欲がない…などは老化のサイン。愛犬愛猫に今までとの違いを感じたら、そのままにせずすぐに受診しましょう。そこに別の病気が隠れていることもあります」とのこと。また、「かかりつけの獣医さんを持つ」とも。「病気の早期発見に健康診断は欠かせません。定期的に獣医療の専門である獣医に愛犬愛猫の状態を診てもらい、若く健康なうちから受診すれば、普段の生活からいざという時まで、個々に応じたアドバイスがもらえます」と話してくださいました。



▲井葉野義弘先生

今回、高齢犬猫の長生きの秘訣について、飼い主、ペットケア専門士、獣医師の立場から、それぞれお話を聞かせていただきました。今回の取材を通じて、共通して最も大切であり、お伝えしたいと思ったことは、「京都にはたくさんの動物病院があるので、飼い主さん自身と愛犬愛猫に合った、何でも相談できる獣医さんをぜひ選んで下さい」ということです。(TM)

## 猫の譲渡室(飼育モデル室)

新しい家族を待っています

センターでこんなことやってます！

**猫の譲渡室へ入るまで** 野良猫が庭先などで産み落とした後、世話をしている様子がなく、自力では生きていけないような生後間もない子猫。センターに保護される猫の約8割は、こうした子猫で、すでに衰弱してしまっていることがほとんどです。

センターでは、健康状態などから譲渡対象となると判断すると、まずは収容室で元気で食欲があるか、感染症等に罹っていないかなど、健康状態を確認します。1週間程度で、問題がなければワクチンを接種し次の検疫室に移します。ここで、追加ワクチンを打つまでの1週間程度を検便等の

健康状態をみながら過ごします。接種後、晴れて譲渡室デビューとなります！

**譲渡デビュー後** 譲渡室には、外からガラス越しに見えるように、飼育モデル室を設けています。そこには、ケージやキャットタワー、トイレを置き、飼い主さんが室内で猫を飼うときのイメージを持てるよう



▲猫舎で遊ぶ猫たち

工夫しており、猫たちは交代で飼育モデル室に出て、自由に過ごしています。センターからの譲渡は、完全屋内飼育を必須としているので、これから猫を飼いたい方にとって、参考になると感じました。

センターでは、保護された全ての猫が必ず譲渡デビューできるわけではなく、経過観察中に体調が急変して命を落としてしまうことも少なくありません。センター獣医の吹野さんは、譲渡する際には必ず新しい飼い主さんに「命を落とした他の子たちのためにも、この残った子たちの命は大切にしてほしい」と言うそうです。皆さんが猫の譲渡室を訪れる時は、ほんの少しでも、こうした背景があることを思い出していただきたいと強く思います。(noe)



## ボランティアスタッフ 活動紹介

**案内活動** 受付コーナーにスタンバイし、

いよいよ活動開始。ドッグランの利用や譲渡希望など、来館者の用件を伺い、簡単な質問にもお答えします。来館者が少ないときは、管理活動や職員さんのお手伝いを行うこともあります。犬を連れて玄関で躊躇されている方に、一緒にどうぞとお声掛けすることも。案内活動をしていてうれしいのは、譲渡が決まった動物たちをお迎えに来られた場面に立ち会えることで



▲受付コーナーにて

**日常活動** ボランティアスタッフの1日

す。お迎えに来られた方も嬉しそうにしていますがそれ以上に動物たちが喜んでくれる様子が見え、今まで苦労してきた分幸せになってねと、心から願う瞬間でもあります。

**管理活動**

主に子猫が生活している場所の給餌・清掃を行います。愛らしい子猫たちを見ていると、このままここに住んでもいいかなとか子猫をもら

ボランティアは、シフトによって来館者の対応をする「案内活動」と収容されている犬猫の世話をする「管理活動」をしています。担当時刻の15分前にセンター到着。赤いスタッフジャンパーを身につけ、スタッフ証を首にかけて準備完了。前の時間帯の担当者から、来館者の状況や案内時の変更点を引き継ぎます。

って帰ろうかな等と思ってしまいがちですが、その反面、こんなかわいい子たちを簡単に捨て去る人に対し強い憤りも感じます。一頭でも多くの子猫たちが譲渡されるようにと願いながら作業を行っています。活動が終了したら、活動日誌を記入して終了。忙しい合間を縫いながらも、「命を守りたい」という思いを持った仲間同士、楽しく、やりがいを感じながら活動しています。(S.W)



▲猫の譲渡室を清掃中